

今年度の研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 「話す・聞く」について

各クラスにおいて、「話す・聞く」の指導がなされ、年間を通して、成長が見られる。年度当初子どもたちとルールを作っていくことを方向性として示したが、各クラスの掲示物等でも確実にそれが行われていると感じられた。学級経営検討会で、それ以外の手法についても、各クラス個性豊かな指導法や実践等いろいろと共通理解できた。

(2) 単元構想について

「単元構想」について、有効性を感じながらも難しいと感じている方が多い。それは今よりもよい構想が立てられるはず、あるいは本時を終えてから、「こうすればよかった」と思った経験からだと思う。単元構想を作ることを通して、子どもの思考を予想し切実になりうる問題を考えようとする^①ことそれ自体が、大切なことである。研究が、教師の成長の場であるとするなら、単元構想を作ること、そうした教師側の思考が磨かれればよいと考える。いつも、子どもの思考の流れはどうか、目の前の子どもの本当の姿をみとろうとする姿勢を、持ち続けるために、今後も単元構想を大切にしたい。

ただ、単元構想を生み出すのはとても大変なことである。その理由は、教師の都合ではなく、子どもの思考を想像しなければならぬし、単元全体を通して追究したいという思いを育てるには、どこでどんなことに合わせればよいのか、教科のねらいは到達できるかなど、複雑に考え、緻密な作業になるからである。一人でがんばるのではなく、たたき台として自分で作ったものを、学年・ブロック検討で出してもらい、ぜひ、子どもの思考を想像しながらみんなで作り上げていってほしい。三の丸の子どもは職員全員で育てるものであるし、そこで、また、互いに子どもの思考を想像することで、教師側の思考、ねらいに到達させる技能が磨かれていると考える。

(3) 「切実な問題」「ひびき合い」「ブロックテーマ」の具体化と共通理解

4月には本校の、研究のテーマにかかわるキーワードである「切実な問題」「ひびき合い」の言葉について、より具体的な言葉^②を足しながら、共通理解を図っていった。また、研究授業が盛んに行われる前の夏には、「ブロックテーマ」の子どもの姿について、「どんな言葉が聞かれたらよいのか」、「どんな様子がみられたらよいのか」、という、より具体的な姿を職員全員でイメージした。そうした活動によって、どのような授業を創るか、目指すところを共有できた^③と考える。次年度においても、研究をスタートさせる際にはそうした共通理解をする場を設け、職員で足並みをそろえたいと考えている。

(4) 事前の学年・ブロックの検討会

①単元としてできそうなものについて情報交換すること ②単元導入前にブロックや学年で検討を行うことを徹底することの2点を踏まえた。時間を割いてこまめに検討会を行ったケースも複数あり、研究に向けて熱心に話し合うことは、成果があった。これからも推進していきたい。

(5) 6年間を通して培う子どもの育ちと、教員の職能発達

「ひびき合う三の丸の子どもたち」は1年では完成しない。6年間をかけて徐々に育ってくる。ブロックテーマを具体的にした今年こそ、よりその段階的な成長がわかるだろう。研究を続けていくことは、子どもを長いスパンで育てていくことにつながる。また、最後の全体研で「やっと予想した子どもの姿が、授業でみられるようになった」と話した4年目の桶屋先生の言葉にもあったように、子どもの具体的な思考が予想できるようになるといったスキルは、単元構想を何度も書き、何度も子ども側の思考に寄り添う経験をして初めて培われていく能力である。子どもの思考に沿う教師側の発想こそ、普段の授業での発問や授業展開の技術に直結し、生かされていく部分である^④と考える。したがって本研究に継続して、取り組んでいく。

(6) 研究同人の参加

研究同人のシステムにより、全体研に他校から参加者が入った。そのことによって、研究会に新しい視点・こちらが忘れていた視点からの発言があり、研究を改めて見直すきっかけにもなった。また、全体研を公開していくことは、授業者には負担が大きいところがあるが、三の丸の子どもを見る視点、授業を子どもと作り出していく姿勢を大切にしていることが、今後も他校の先生方に伝わればとも思う。

2 研究の課題

(1) 子どもたちの関係づくり～かかわろうとする子どもを育てる～

学級経営検討では、本年度は「聞く・話す」を中心にやってきたが、基本的に「友だちに興味をもち」「かかわろうとする」雰囲気かやや薄いという反省が多く寄せられた。集団の中で、自分の考えを広げたり深めたりする経験をしていくためにも、友だちへの興味関心を高めたり、互いにかかわる楽しさを知ったりする必要がある。学級経営の中で、もしくは各教科の学習の中で、そうした子どもたちの関係作りを積極的にしていく必要がある。学級経営検討会では「聞く・話す」とともに「友だちに興味をもち、かかわろうとする子」についても、子どもたち同士の関係をつくる実践をお互いに話し合っていく。学級活動、道徳、体育、総合などの実践も持ち寄って、話すのもよいと考えている。

(2) 本時の「どこで深まるのか」を捉える～教科のねらいや目指す子どもの姿に到達する（ひびき合う）ために～

4 回の研究授業（全体研）やその他のブロックの研究授業でも課題となったのは、子どもたちの意見がでたあとで、子どもたちの気づきや深まりを生む場面が、曖昧であったり、何となく深まった？のような雰囲気で行ったりすることが多かったことだ。教師が意図的に、子どもたちの話し合いをどのように深めるかを考え、手立てを講じる必要がある。また事前に、その点について、互いに検討したり、具体的な案を出したりできれば、さらにスキルアップできると考える。来年度は、その手法を具体的にしていくな必要があると考える。「どこで（ひびき合う）ことをねらうのか」そのために「何を教師側の出所として準備するのか？」をより具体的に考えていきたい。

なお、本時「ひびき合い」を生むための工夫は、教師の出所以外にもある。反省をもとに整理して4月にたたき台を提案し、研究として深めていく。

(3) 研究協議の記録の方法

記録においては、記録者が偏っているという意見をいただいた。記録の仕方を習得するためにも、順番で回していきたい。また、あの記録用紙の中で、得るべきものは、その中に書かれている本時における具体的な手立てである。具体的な手立て（＝どうすればよかったか）について赤で囲うのがよいと考える。したがって、色についても整理し、次年度より細かく提案し、見やすいものに整えたい。

(4) 転任者にも理解をしてもらうために

本校の研究は、転任してきたばかりの先生方や新任の先生方には、理解がしにくい傾向にある。それは、今までやってきた教師主導の授業とは全く正反対の立場に立っているからである。学習者の主体的な学習過程に合わせた授業展開は、今後の文部科学省の答申にも示される予定で、教員にとって発想の転換を図ることが求められている。この発想の転換は、すぐにはむずかしい。しかし、本校の研究は、そうした学習者の思考過程を大切にしたい授業展開を目指しており、今から、自分なりに試行錯誤をしていくことは、とても有効である。

よって今の研究テーマを維持しつつ、全員で共通理解をするためにも、もう少し研究の計画を見直す必要があると考え、以下のように提案したい。

- ① 6月・7月に各ブロック一本程度の全体研究授業を行う。
- ② 研究協議では、どのように子どもと単元を創ってきたか、授業者より具体的に話をする時間をつくる。
- ③ 経験の少ない人から、質問したり意見を言ったりできるようにする。

(5) いろいろな教科で試してみることの推進

「ひびき合う三の丸の子どもたち」を目指し、研究を日々の授業に生かそうと「この教科ではどうだろうか?」「この単元ではどうだろうか?」という発想は、もちろんあってよいと考える。そうしていくことこそ研究の意味がある。そこで、「ぜひこの教科で」という思いがあれば、それを実践し、研究授業として提案してよいことにしたい。「切実な問題」について子どもが本気で「ひびき合おう」としている姿が実現できればよいと考える。ただ、どうしても技能教科は、活動量の確保がひとつであるし、板書や補助発問など、他教科よりも協議しにくい傾向にある。事前に学年やブロックで教科や単元を検討し、実践してほしい。

(6) 授業の基礎基本を学べる場を日常的に創る

初任者をはじめ、経験者の多い学校である。授業の基本的な技術、声を張る・子どもの声をまつ・指示を明確にする・短い言葉で・・・等々、教員の資質として基本的に大事なことがたくさんある。そうしたことが十分身につくよう、いちご研修など、日常的に研修を深めていく場をつくっていけるような職場にしていきたい。